



中央教化団体聯合会指導 日本教育紙芝居協会製作 昭和13年(1938)10月5日発行 39.1×27.6cm 全24枚 関和昌さん寄贈

資料紹介 銃後の華 (国策紙芝居第二巻)

昭和12年(1937)7月7日夜、北京郊外盧溝橋の畔で夜間演習を実施していた日本軍に対し中国軍が発砲する事件が勃発した。日中戦争の始まりである。

この年から敗戦まで戦争を鼓舞し戦意を高揚させる宣伝活動の役割を担ったひとつが戦時下に発行された印刷紙芝居である。実演の手引には「いつでも、どこでもだれにでも てがるにやれて おもしろくたになるすぐれた教具 教化の武器」とある。絵の裏には台詞のほかに「めくりつゝ」「口調をかへて」といった実演の指示が入る。

軍需工場で働く秋山みどりが昭和13年4月から6月にかけてあった徐州作戦において失明した軍人田村幸一上等兵と結婚する美談である。結婚式で参列者全員が愛国行進曲を歌い「国を護つた傷兵護れ」で幕となる。

傷病兵の援護、そして当時の模範となる家庭像が二人によって体现されている。みどりの決意「温かい家庭と与へることこそが、あの人々に対する最も大きな贈物で

あるに違ひない」。父との会話にあるみどりの発言「あの方も傷兵保護院などのお力で、不自由なお体に合ったお仕事を習つてゐらつしやる」。二人が勤める工場の社長の祝辞「政府では十月一日から名誉の戦傷者に、護国の偉勲を物語る徽章を佩用させ、一般国民の尊崇の目じるしとすることになつてゐます」などの台詞にあるように作品制作の背景には、戦争拡大により傷病兵が激増し、13年4月に傷兵保護院が設置されたことがある。

紙芝居の持ち主であった関直次さんは戦時中に日高村の在郷軍人会分会長や翼賛壮年団長、17年から日高村助役を務めるなど国策運動を実践する指導的立場にあった。

本資料は、昭和13年7月20日発足の日本教育紙芝居協会から発行された国策紙芝居の初期作品である。神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターの調査によれば、実物の所在は確認されていなかったものである(『国策紙芝居からみる日本の戦争』2018年)。

(萩原明子)

諏訪遺跡出土土器の「生涯」からみる人々の暮らし

金子 悠人

現在、日本国内では多くの遺跡で発掘調査がおこなわれています。しかしながら、発掘中に植物遺体が確認されるケースは多くありません。熱を受けて炭化したり、地下水位の高い場所で水漬けになっていたりしない限り、腐ってしまうためです。

そうした植物の痕跡を間接的に知ることができるのが土器圧痕です。圧痕とは、土器にみられる「くぼみ」のことで種実や昆虫などの有機物が認められる痕跡です。土器を作る際に混和したものと考えられています。土器の製作時に当時の人々が意図的に混ぜたものか、偶然に入り込んでしまったものかは議論の余地がありますが、粘土に有機物が混ざったまま土器が焼成されることで、有機物が焼けてなくなり、圧痕のみが残るのです。

この圧痕にシリコンゴムで型取りをし、電子顕微鏡で観察する「レプリカ法」により、当時の人々の植物利用や土器の製作環境が分かるようになってきています。

今回は、そのレプリカ法を用いて、諏訪遺跡（日立市諏訪町3丁目）から出土した土器を対象に圧痕調査を実施しました。その結果、縄紋中期中葉の土器の外底面から16点もの多量の圧痕が検出されました。そのうち11点はアズキ亜属種子と同定できました。これらは、現在私たちが食しているアズキの祖先野生種であるヤブツルアズキであると考えられます。縄紋時代の人々が食べていたのでしょうか。土器作りの場に近いところにヤブツルアズキがあったことが分かり、当時の人々の植物利用の一端が垣間見えました。

今回同定できなかった不明種実も含め、16点の圧痕全てが土器底部に集中していることも興味深いです。この土器は、『諏訪遺跡発掘調査報告書』をはじめ、多くの文献で紹介されてきましたが、底部の圧痕についての言及は多くありませんでした。筆者は、大学の諏訪遺跡の土器の見学に同行する過程で土器の底部に多くの圧痕があることに気づきました。その時には、石岡市で「敷物圧痕」の研究をしている最中でしたので、底部をより慎重に見る癖がついていたのかもしれませんが。重要な成果が期待できたため、その後何度か博物館に通わせていただき、圧痕のレプリカ採取や顕微鏡での観察を経て、公開することができました。

ちなみに「敷物圧痕」とは、現在のかごやざるなどの編組製品と呼ばれる「編む」「組む」ことを主体とする製品が土器底部に付着した痕跡です。編組製品以外にも、植物の葉などが付着する事例もあります。これらは、土

器の製作時に現代のロクロの代わりとして底部に敷いた際に付着した痕跡と考えられています。

16点の圧痕が検出された底部には、上記の敷物圧痕も付着していました。土器製作開始時に粘土を敷物に置く際、その敷物の上にヤブツルアズキが点在しており、そのまま土器製作を始めてしまったのでしょうか。とすると、縄紋人はあまりきれい好きでなかったのかもしれませんが。それとも作業場が暗くて手元が見えなかったのでしょうか。想像は尽きませんが、敷物圧痕と16点の種実圧痕により、当時の土器の製作環境も考えることができました。

さらに、この土器の内側には炭化物も付着していました。分析の結果、植物由来の食べ物を煮込んだコゲの痕跡の可能性が高いと考えられています。これは、圧痕が混和した土器も、他の土器と同じように煮炊きの道具として普段使いされていたことを物語るものです。

また、発掘調査の記録を紐解くと、他の土器と一緒にフラスコ状土坑に廃棄されていることが分かりました。

炭化物や出土状況からみると、お祀りなどで使用したものではなく、偶然種子が入り込んだように思えます。

以上のように、土器一つだけでも多くの情報が隠されています。特に今回紹介した土器は、製作→使用→廃棄といった「土器の生涯」をたどることができました。その生涯からは、当時の人々の食物や製作環境を復元することができます。今後は、さらに多くの「生涯」を観察して、人間の営みを解明していこうと思います。

（かねこ ゆうと 石岡市教育委員会文化振興課）

【主な参考文献】金子悠人・小林謙一・佐々木由香・猪狩俊哉2024

「諏訪遺跡における炭素14年代測定とレプリカ法による土器圧痕調査―土器の製作・使用・廃棄の把握―」『茨城県考古学協会誌』36



土器圧痕と敷物圧痕が残存する土器とその底部